特集

横浜の教育改革

《1》新しい時代の子ども・学校・教育

①教育の原点を取り戻すために

1 失われた「自分育ての時間」～携帯とゲームの普及～

率直に言って今の混迷を生み出した具体的なツールはゲームと携帯電話だと考えます。我々の時代には暇だなあと思うことがいっぱいありました。テレビの番組選びの主導権も大人が持っていました。子どもが見たい番組を自由に見られるような環境ではありませんでした。その暇だなあと思うときに何をするか「自分育て」「教育」の意味ですごく大事な時間だったと思います。現代の子どもたちは、その時間がゲームにあてられてしまいます。あるいは携帯電話でのメールのやり取りにあてられてしまう。「教育」という営みは、学校の授業時間やカリキュラムの中だけの問題ではありません。友達との遊びの時間、暇だなあと思うあの悶々とした時間、そういった時間も振り返ってみると、そのときに考えたことは大きな人生の肥やしになっています。ゲームや携帯電話が普及したことにより、その時間が削減されてしまいました。その時間の削減こそトータルとしての教育力の低下に結びついていると考えています。

学力というと勉強だけをさすものだと思われていて、言葉自体が一人歩きしています。そうではなくて、「学ぶ力」全般を「学力」と言うのです。暇だなあと思うとき、自分の未来を漠然と想像する。そうすると「今のままではこんな未来だ」「やだなあ、じゃあ勉強しよう」と、なっていました。学ぶ力を育むための時間が携帯電話やゲームの普及により削減されたということは子どもたちの環境の変化として大きいものがあります。

一方で、受験の問題があります。子どもたちに暇がなくなったといいますが、80年代を生きた自分たちのころは「受験戦争」とまでいわれる時代でした。第二次ベビーブーム世代で受験競争も非常に厳しいものがありました。たしかに少子化は進んでいますが、受験という観点から見れば、そのときの環境と今の環境と大きな差異はないと思います。自分たちの世代も、とにかく「勉強、勉強」と言われてきました。異なるのは「暇だなあ」と持て余す時間があるかどうか。その時間をいろいろなツールが埋めてしまいました。子どもたちを取り巻く環境の変化で大きいのは「暇な時間」がない、「ゆとり」がないということに尽きます。

2 大人が体を張ってハードルに！

あるアメリカの調査ではメディア社会に生きる子どもたちはテレビ、ゲーム、インターネットなどの世界で、小学校を卒業するまでに8000件の殺人を目撃し、10万件の暴力行為を目撃しているとのことです。10歳そこそこの子どもが殺人や暴力行為を繰り返し目撃することは今までなかったことでしょう。その意味では歴史上もっとも不幸な世代といえるのかもしれません。彼らが目撃しているのはバーチャルリアリティーの世界で痛みがまったくありません。そんななかで衝動に対してのハードル、命に対してのハードルが極めて低くなっています。そのハードルは大人が常識的に考えているより、もっと低いのです。彼らは簡単にハードルを乗り越えていってしまう現実があります。だからこそ、大人が本来の情熱と愛情をもって、体を張ってハードルになる必要があります。

不安な時代になると「みんな」「普通」とか、そういった横並びの価値に人々は依拠するようになります。「みんな持っているから」というだけで、安易にゲーム、インターネット、携帯電話を与えてしまっていないだろうか。現

この稿は平成18年7月25日に行われた義家弘介氏へのインタビューを基に、都市経営局政策課が編集・構成したものです。

義家　弘介
横浜市教育委員
元北星学園余市高等学校教諭。
著書『不良少年の夢』『ヤンキー先生のたからもの　天使たちの詩』など。

実には約束もなしに「みんな持っている」という根拠だけで与えてしまっています。ハードルが下がり、やがてハードル自体がなくなってしまう時代が訪れるような気がします。家庭生活でハードルがないときに学校教育でハードルを教えろといっても説得力がありません。今の教育は説得力を持たないと子どもたちを導けません。子どもたちの現状を把握した上で、説得力のある教育を行っていかないと子どもたちの未来はますます曇っていくと感じています。

3 「学び」のツール選びは親の責任

学びの教材の提供は大人の責務です。たとえばある風景を見ただけで学べることもあります。望遠鏡を買い与えたことにより学べることもあります。学びのためのツールは大人たちがその都度、提供していく責任があると思います。まず、前提として考えなければならないことは「子どもたちは学びの天才である」ということです。「いまどきの子どもたちは…」なんて言っている人間は子どもたちを見ていないだけです。興味のあることに関して、子どもたちは学びの天才です。学びのチャンスをどの方向にもっていくのか、大人はしっかり考えなければなりません。学ぶべき対象物を与えてあげなければ学びは継続しません。

たとえば自分はどんな学びを与えられてきたかというと、膨大な本です。暇な時間がたくさんありましたが、おこづかいが与えられていません。一番したかったのは自由にテレビを見ることでした。しかしそれは制約されていました。次にしたかったのは漫画を読みたかった。でもおこづかいがないから買えない。うちの親は何を与えたかというと膨大な本だけを与えました。「こんなの読まないよ」という本でも、暇だと読むものです。読めとは言われたわけではありませんが、なんとなく本を紐解きました。そのときはありがたいとは思いませんでしたが、たくさんの本を読んだということは自分自身の文章を書く力には欠かせないものでした。想像力を身につける点でも欠かせないものだったと思います。わが子のことを一番知っているのは親なのですから「どんなことを学ばせたいのか」よく考えてツールを与えていくことが大事です。忙しい中で麻痺していますが、子どもは本来学びの天才なのです。天才ぶりを発揮させるためにも「暇だな」と思う時間は大切だと思います。カリキュラム、時間割が決まっている中で、それ以上別のものを学びなさいというのは現実的には無理な相談です。どこかで悶々と「暇だな」と思える時間を確保してあげることも大人たちの責任だと考えます。

4 教育は「入口が狭く」「出口が広く」なるもの

いまさら「ゲーム、携帯電話を与えるな」とは言えません。問題は「大人たちが与えたものに責任を持つ」ということです。教育というのは本来、入り口が狭く、出口が広い営みです。しかし今の現実は入り口が広くて、出口が狭くなっています。「みんな」「普通」という横並びの概念で入り口の時点でいろいろなものを保障します。そして、問題が起こるたびに規制を強めていきます。そして出口ではものすごく不自由になってしまう。そこに「大人」と「子ども」、「教師」と「生徒」の軋轢が生まれていきます。子どもは未熟なのですから、本来、与えられるものは限られています。入り口というのは狭いものです。狭い入り口からスタートして、成長とともにいろいろなものを保障していくという、本来当たり前のことを取り戻すことが必要です。

市内の学校を訪問して親御さんから伺った話ですが、中学校2年生になる娘さんから「携帯を持ちたい」といわれたそうです。よくよく考えた末、携帯を与えなければならないと思うようになりました。ただし、与える前に携帯が欲しい理由を「レポート」させたそうです。「誰々が持っていて」「こんな活用の仕方があって」と書いてくるわけです。何度も不十分な部分を指摘してつきかえします。お子さんは本当に欲しいから何度も出してくるわけです。そして、いよいよ「携帯を持ってもいいよ」となったときに、非常に細かい項目を定めた契約書を作り、リビングに貼りました。「月の通話料は5000円まで、超えたら即刻解約」「夜寝るときは携帯電話をリビングに置く」「自分の部屋には携帯電話を持ち込まない」など、内容はかなり厳しいです。そんなあるとき、通話料が5010円になったときがあったそうです。大人の世界でも契約に違反したらそこで信頼関係は終わってしまう。お母さんは目の前で携帯をボキッと折ったらしいです。なかなかできることではないです。お父さんが言ったそうです。「母さんは憎くてやったわけじゃない。これが社会なんだ。父さんもこういう社会で生きている。」「もし、また欲しいなら、まず自分の実績を積み上げな」とアドバイスをしたそうです。その言葉を聞いて、娘さんは一生懸命努力したのでしょう。3ヶ月後にもう一度携帯を買い与えたそうです。そのときの条件は格段に一回目の条件よりゆるくなっていました。「寝るときにリビングに置かなくてもいい」とか「メールは親がチェックしない」とか。この間に成長があったのでしょう。

成長に応じていろいろな自由・権利を保障していく。これが本来の教育です。バーチャルなものが溢れる中で、人間との関係を中心とした教育を取り戻すことが重要なのではないでしょうか。多様化する教育環境の中で、もぐら叩きのように新しい教育方法論を導入するのではなくて、本来の形に戻るべきなのです。とにかく不安の時代になればなるほど「みんな」「普通」

という横並びに依拠する傾向があります。「みんな」「普通」ではなくて「あなたはどうするのか」そこから始まらなければなりません。

わが子に関して言ったら自分で維持できるまで携帯を渡す気はありません。自分でアルバイトして稼いで、だから高校生になってからでしょう。学べば学ぶほど怖いツールでもあるわけですから。

5 学校とは問題を解決する力を育む場

学校とは何かといったら、一言で言えば「教育の場」です。「教育とは何か」と言ったら、バランスのいい、社会で通用する能力を、学力も含めて、創造していく場所、あえて言葉にしたらですが。実はいま、塾の学校化が進んでいます。「塾＝勉強を教える場所」というイメージがあります。現実に塾を回ってみていただきたいのですが、実は塾でも教育的な指導をしています。塾の学校化が進む中で、学校の権威というものが失墜している現実は確かにあります。一方で考えなければいけないことは、社会で通用する人材を育むために、自らと違うたくさんの価値観にまみれることです。学校の中ではいろんな不条理も起こります。子どもが苦しむようなことは排除する方向になっていますが、不条理なことがあっていいのです。問題は不条理が存在することをどうやって解決するかにあります。学校は問題解決能力を育む場所でもあるわけです。学校が力を入れるのはそこだと思います。問題解決能力を育むためには問題がないとダメなのですが、問題が起こると保護者があれこれ言うわけです。事前に問題の芽を摘み取ってしまっては、本当の意味での解決能力は育めません。解決能力を育めない状況が現代の学校にはあります。問題＝悪ではなくて、問題を解決しないことが悪です。未熟な子どもたちが集団づくりをしていったら問題は当然起きるわけです。その問題をどのように解決していくかが大切なのです。机の上のお勉強だって同じです。この問題にどう答えを導き出すのか。問題解決能力をトータルで育む場所が学校であるわけです。勉強以外の問題解決能力がさまざまな理由で育めない環境になりつつあります。そこをまず変えなければなりません。「学校は何をする場所か」という問いが起こってくること自体、非常に危険なことだと思うのです。それぞれの答えがあると思いますよ。それぞれの答えがあって然るべきです。しかし、それに答えようとすると不安になってしまう現状があります。あるいは教師任せで、教師を批判するだけの現状、あるいは教育委員会だけを批判する現状になっているとしたら、むしろ逆にあなたに「学校は何をする場所なのですか」と問いたいです。塾の学校化は明確です。問題解決能力を育むには単に勉強だけ教えても育めないわけですから。

6 学校から地域をノックする横浜モデル

今の地域に一番必要なことなのですが、マザーテレサの残した言葉を噛みしめるべきだと思います。「愛情の反対は無関心である」。関心を持つことからすべては始まります。教育は「愛」ですから、そこは根底として関心がなければなりません。その意味で、関心をもって学校に入ってきてくれる地域ボランティアというのは、もっとも尊敬されるべき人間なのです。開かれた学校づくりということで「学校を開く週間」というものを実施しているのですが、形だけ門を開いて、ただそのままという学校が非常に多くあります。やはり学校は敷居が高いです。都市化している横浜なら特に、母校でもなく、子どもが通っているわけでもない学校に「どうぞ来てください」と言われても、なかなか行きづらいものです。「学校を開く週間」というより、これからは学校から生徒、教師が出て行く、「学校から出て行く週間」のほうがいいと思うのです。地域にさまざまな働きかけをしながら学校を理解していただく。そこから始めるべきだと思うのです。今までは地域が学校に働きかけてきました。しかしこれからは学校から地域にノックしてそれに地域が答える新しい横浜モデルを創っていくべきでしょう。田舎だったら学校を開けばみんな協力してくれるかもしれません。横浜は都市部ですから都市型の「学校がどんどん出て行く」「学校からノックする」地域学習スタイルをこれから構築していかなければならないと感じています。

7 市内の学校を訪問して感じたこと～素晴らしい実践の共有を～

良い事と、悪い事を分けて述べさせてもらいます。まず、今の学校に失望しているすべての人は学校を見に行くべきです。希望を感じることでしょう。社会で言われているようなボロボロの状況ではない学校はたくさんあります。本当に生活を賭してがんばっていらっしゃる先生方もたくさんいます。学校とは本来、絶望を嘆く場所ではなくて、希望を語る場所であるべきです。その意味で、希望は横浜市のいろいろな場所に眠っています。はっとする教育実践もあり、はっとする子どもの気づきもあります。訪問するたびに感じることです。

もう一方で、悪しき部分で言ったら、そういった職人がいる一方で、教師集団全体としての連携がとれていません。すばらしい取組みが行われている学級があるのですが、すぐ横の学級では行われていないということを見かけます。いいことは共有していくべきだと思います。その意味で、学校の職員室のあり方についても、もっと変えていくべきだと思います。学校を訪問したとき、必ず職員室を見ます。そうすると往々にしてこういうことがあります。机が並んでいるけれど真ん中

に本棚があって、お互いの顔が見えないのです。本来なら自分が教えている共通の児童・生徒のことを語れる場所が職員室なのですが、顔さえ見せずに黙々と机で教材を作っている教師がいます。

一人にできることは限界があります。だからこそ「教師集団をどう作っていくか」が重要になるのです。素晴らしい実践を共有していくこと、それが全体の底上げにつながります。いま、子どもたちの置かれた環境は多様化、複雑化していますから、そこに一人の万能の教師が接するということはできなくなっています。いろいろなタイプの教師がベクトルを共有して、面として接する、そういう仕組みを作っていかなければなりません。その意味で、少なくとも職員室では子どもたちのことを自由闊達に語り合える場所であるべきでしょう。

横浜市は規模が大きい自治体ですから、素晴らしい実践がたくさんあるはずです。日本一の実践だってあるでしょう。極端な言い方になりますが、各学校で今まで在籍した先生方の教材を保存・共有していたらどれだけ大きな財産になっていたことでしょう。とてつもない教材が出来上がっているはずです。現行では教師が転勤したら持っていってしまうのです。教育委員会が行っている「ハマアップ」は優れた教材を共有するという事業なのですが、そこに楔を打ったものであると感じています。

8 横浜が育てる「子ども」は

横浜教育改革会議の答申が出されたわけですが、この答申は、本当に、多彩な議論の末に出来上がったものです。多様な視点が織り交ぜられており、現実的に、答申の内容を全て実施するのは大変な作業になるでしょう。しかし、教育改革の上では、すごく大事なことなのです。ただし、その前にしなければならないことがあると私は考えます。たとえば基礎ができていないところに家を建てたらどうなりますか。やはり傾くでしょう。まずは基礎をどう構築するのか、これが第一歩になると思うのです。その基礎とは何かというと「横浜市は具体的にどういう子どもを育てたいと思っているのか」ということです。教育ビジョンとか教育改革とは言っても「どういう子どもを育てたいのか」という核がバラバラで、それぞれがバラバラな方向を向いていたら、施策をしても、そこにあてはまらない子どもや教師たちは取り残されてしまいます。まず共有する最低限の「横浜市ではこういう子どもを育てるんだ」というビジョンづくりが必要でしょう。教育改革についての柱については教育改革会議にお願いしました。事務局も夜を徹して原案を作っています。しかし一方で、「どういう子どもを育てたいのか」という最も基本的な議論を教育委員会でしっかり行って、その上で実施していかなければならないものだと考えています。2年間の苦労を我々は無駄にしてはなりません。その責任を負っていると思うのです。だからこそ実施するためには「どんな子どもを横浜市は育てたいのか」という、明確な骨子、土台というものを明らかにする必要があります。それをいちはやく、どんなに議論をつくしても、明確にするべきだと感じます。それが、ずっと議論を尽くしてくれた横浜教育改革会議への責任であると強く感じています。

「どういう子どもを育てるか」ということについて、私の個人的な意見と前置きさせていただきますが、「共感する力」「創造力」「公共心」が重要と考えています。「共感する力」(他者に共感できる力)、「創造力」(何もないところから材料を集めて何かを作っていく力)これは昔の遊びの中で育まれてきたものだと思います。「公共心」道徳も含めて公の心をちゃんと身につけさせることは重要なことです。

9 原点回帰の教育を ～団塊の世代への期待～

今まで、個人主義といって、個人が偏重されてきたように感じていますが、私たちは一人で生きているわけではありません。人間は弱いから、常に公の意識を持ちながら育ってきました。やっていいこと、悪いことの区別は両親やおじいちゃん、おばあちゃんからずっと教えられてきました。こういった教育の原点こそが重要なのです。「新しい教育」というよりも、「原点回帰の教育」であるべきだと私は思うのです。こういうと、「昔の教育勅語に戻るのか」と言う人がいますが、そうではなくて、本来ずっと我々が大切にしてきた原点を大切にしようということです。どんなに時代が流れても、複雑化しても忘れてはならない原点があるはずです。この原点を取り戻すこと、これが何よりも大切だと思います。核家族化の中で、世代間の踏襲がうまくいかなかったことも理由のひとつではあると思います。

実は今すごくチャンスだと思っています。定年退職していく団塊の世代の人と話をすると、教育に責任を感じている人が多いのです。自分たちのやり残したことはここにあると。団塊の世代が本気になって「新しい親学」自分自身が親として足りなかったことも含めて、「新しい親学」を構築して次の世代へ伝えることができるかもしれない。それができたときに、新しい教育の夜明けがくる。「子ども」「学校」あるいは「地域」が、少しでも今よりは安心できるものになると私は思います。そのために今、自分が何をしなければならないのか。鶏の役割を担おうと思っているのです。「うるさい」と言われようが、「生意気な」と言われようが夜明けを知らせ、寝ている人間を片端から叩き起こす仕事です。

「新しい教育を担う若い世代」の活躍にも期待しています。教育の世界に新しい夜明けが来ることを信じています。